世界自然遺産白神山地に対するイメージ: 聞き取りから明らかにした各関係者の認識

北海道大学大学院　環境科学院
環境起学専攻　実践環境科学コース
三部真優

白神山地は秋田県北西部から青森県南西部に広がる山岳地帯の総称である。生態系の学術的価値が認められ、その山域のうち約 1 万 6000ha が世界自然遺産として 1993 年に登録された。登録に向けてかけられた自然保護の網によって、山菜採集や狩猟といった従来の営みが登録地域内で出来なくなった。自然の利用形態の変化に加え、遺産登録に伴い原生的自然のみに価値が置かれ、コミュニティの考えていた「人間と共生する自然」という価値認識と乖離したことが指摘されている(外崎 2015)。観光関連事業者に対するアンケートからは、事業者間で白神山地におけるエコツーリズムの将来像の明確化・共有が出来ていないことが明らかになった(環白神エコツーリズム推進協議会 2014)。特定の地域や職業について言及された研究はあるものの、遺産登録後の白神山地に対する人々の認識を包括的に捉える研究が必要となっている。

本研究では白神山地に主体的な関わりを持つ関係者の白神山地に対する認識とその全体像について明らかにし、認識の違いが生じる理由や新たな視点を見つけることを目的とする。2019 年 12 月～2020 年 11 月にかけて理論的サンプリングで選んだ計 66 名に対し、1 対 1 で半構造化インタビューを行い、白神山地の魅力や捉え方について自由に語ってもらった。インタビュー内容は質的データ分析法(佐藤 2008)に沿い、インタビュー中の発言をコード化した後に分類、更に抽象的な概念へと高度化させ分析を行った。

分析によると、職業や立場に関わらず、関わる年数や経験の質・種類、得た知識等により、白神山地に対する認識や理解の仕方は変容していく。自然・歴史・文化など、関係者が白神山地に対する理解を深めていくと、心の中で独自の白神山地像（以後 my 白神とする）が形作られていく。このmy 白神の成立や高度化の過程は、①経験の蓄積(他者と考えを共有できない)と、②言語化の 2 つに大きく分けられる。多くは①によって my 白神を成立させるため、自身の my 白神について言語化する機会が少なく、他人と互いの my 白神について共有することもない。インタビューイの「入れば分かる」は、まさに象徴的な言葉である。追体験をすれば同じ my 白神が得られることが期待される一方、全く同じ体験や背景は存在せず、「入れば」my 白神を完璧に共有できるわけではない。多くの人は、白神山地に出会って暫くは経験・知識を増やす中で比較的共通の my 白神(common sense)を成立させる。その後、少数のより深い理解をした my 白神同士が相互作用しつつ、各自が my 白神をより高度なものへと発展させていく。分かりやすい共通認識ではなく、自律した my 白神同士が相互に作用しあう状態(＝エコシステム)になっていることが、白神山地に対する認識の全体像(＝our 白神)の一つの形であると明らかになった。より包括的な白神山地像を明らかにするには、他の地元住民や観光客、社会から見た白神山地像等も含めた検討が必要となる。